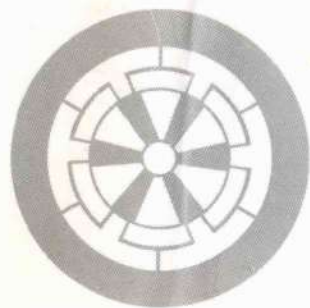
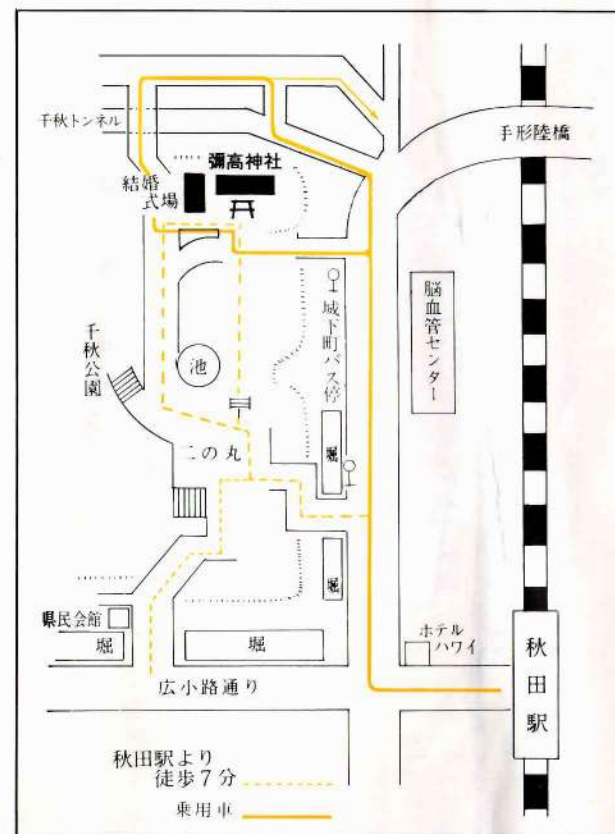




彌高神社の由緒



案内図





平田 大人



佐藤 大人



彌高神社

彌高神社由緒

例祭日 五月二日

祭神 平田篤胤大人命
佐藤信淵大人命

明治十四年小谷部甚左エ門他門人有志にて八橋に平田神社を創建、後秋田県教育会これが崇敬者となり、明治四十二年前秋田図書館跡地にありたる旧県社八幡神社社殿を購入修理し、平田神社を此処に奉遷、同時に佐藤信淵大人命を合祀し、社名を旧藩主佐竹義和公書明德館題額「仰之彌高」に因んで彌高神社と改称せり、大正五年千秋公園現在地に奉遷、大正八年二月県社に昇格、昭和十八年十一月二日平田篤胤大人命百年式年祭、昭和二十五年十一月三日佐藤信淵大人命百年式年祭を盛大に執行せり。

昭和二十一年以降秋田市中通学区、明德学区、築山学区、保戸野学区等に崇敬団体たる『彌高会』が結成され、昭和三十三年斎館直会殿が建設されて現在結婚式場として広く、県市民に利用されている。

平田篤胤大人

平田篤胤、本姓は大和田氏、幼名を正吉といい、安永五年八月二十四日元の秋田市中谷地町に生まる。

荷田春満、賀茂真淵、本居宣長と共に国学の四大人である。八才にして秋田藩の儒官中山善我に従ひ漢学を学ぶこと年あり十一才の時より叔父大和田柳元につき医術を修む。十五才元服して胤行と名乗り大いに感じる所あり、経史に思いをひそめ武術に意をこらし寝食を忘れるに至ると伝えられている。

二十才志を立て江戸にいたり苦学力行、二十五才、備中の国松山の城主の家臣平田藤兵衛の養嗣子となる。二十六才（享和元年）本居宣長歿後の門人となり精勵刻苦、和漢の群籍に渉獵し盛んに学殖の蘊蓄に努めた。通称を大角と改め、その家を号して真菅の舎とよび後改めて氣吹の舎という。二十八才（享和三年）叫妄書一卷をものし、大儒太宰純の弁道書を完膚なきまでに論駁し、堂々大論を構えてより一身を学と道に捧げ当時瀾漫していた尊外卑内の時代思潮の廓清をはかり、又、諸道の大意を講明して、学界革新の意図を表明するに至る。著述百部千余巻に達し、その学古史、古道、易学、曆学、道学、儒学、仏学、文学、語学、

尺度、キリシタン等相漢洋にわたる。就中主著古史成文、古史微、古史伝、霊の真柱を完成し神道史上空前の進歩を示した。白川神祇伯家に聘せられて学頭として学則を訂正し、吉田家の依頼をうけてその末流に古学を授け偶々、その説に抗する者に対しては烈々天を衝くの氣概をもって迫った。その学と道は終に幕府存立の根柢をゆるがしめるに至り、六十六才（天保十二年）江戸追放のせめに逢ひ帰藩秋田に到る。天保十四年閏九月十一日中亀ノ丁の屋敷に歿す。享年六十八才手形広沢山に葬られた。平田大人の碑文にいう「天地の広く大なる志」「日月の高く明かなる智」「大人は其身現世の人ながら其智は神にぞおはしける」とたたえている。

佐藤信淵大人

佐藤信淵は、元海椿園と号し、通称を百祐という。

明治六年六月十五日雄勝郡西馬音内郷に生まれ、父は信季という。高祖歙庵医を業とし、経国済民の学を講じ、曾祖元庵これをうけ、祖父不昧軒は農政、山相、開物の学を修めその三男信季分家して専ら家学をつぐ。信淵十六才（天明三年）父信季秋田藩のため開国の要義を建白し執政の忌む所となる。父の死後遺訓に従ひ江戸にのほり宇田川槐園の塾に入り蘭学を修め、井上潜に経済の学を、木村泰蔵山村昌永に天文、地理、動植物の学、曆算測量等を学んだ。二十六才（寛政六年）江戸京橋に医を開業、二十九才（寛政九年）母の死に遭ひ、心を励まし家学の大成に志を立て上総の国大豆谷に退居して、晴耕雨読の生活前後三十年に及ぶ。四十七才（文化十二年）平田篤胤の門に入り、家学根柢の哲理の樹立を得たが、その頃事に座して江戸追放にあひ諸国遊歴。その間或いは農政漁法を指導し、或いは諸侯の顧問となり、藩政を改革し、家学を実地に試み専ら家伝書の修訂増補につとめ、六十二才（文政十二年）農政本論及び草木六部耕種法の著述を完成し、家学を大成するに至る。信淵の諸国遊歴は実に四十八才より七十八才に至る三十一年間にわたる。この間に築かれた学は、ただに農政の学に限らず、政治、経済、哲学、天文、兵学、医学、鉱山、拓殖、治水にわたり、著述三百種八千巻と称せられる。七十八才（弘化三年）追放ゆるされて江戸に帰り、沈澗重疊、不遇の生涯を終えたのは嘉永三年正月六日、享年八十二才、浅草松応寺に葬られた。信淵の経世済民の実学の根柢は、篤胤の神道思想にあつたことはその著宇内混同秘策に「曾て子が著したる経済大典及び天刑要録等は悉く産霊の神教を講究したる書にして、即ち、全世界を安集するの法なり」とあるに知られる。